わが親愛なる パレスチナ隣人へ

イスラエルのユダヤ人からの手紙

ヨッシー・クライン・ハレヴィ 著
神藤誉武 訳

Letters to My Palestinian Neighbor

Yossi Klein Halevi

ニューヨークタイムズ・ベストセラー

「イスラエル・パレスチナ紛争に関する最高の入門書」

ジェフリー・ゴールドバーグ
（米誌『アトランティック』編集長）

ミルトス

著者の自宅から見える防壁

著者（左）とアブドゥラー・アンテプリ師

読者の皆様へ

私はこの五年間、イスラム教の指導者（イマーム）でデューク大学のアブドゥラー・アンテプリ師と共に、ムスリム・リーダシップ・イニシアチブ（the Muslim Leadership Initiative、以下ＭＬＩ）を指導する栄誉に与（あずか）っています。これは、新進気鋭のイスラム系アメリカ人指導者たちに、ユダヤ教とイスラエルについて教える教育プログラムです。これまで、ＭＬＩを通して、百人以上の参加者がシャローム・ハルトマン研究所のエルサレム・キャンパスを訪れています。同研究所は、ユダヤ教の多元的なあり方を推進する優れたイスラエルの研究教育センターで、ＭＬＩのスポンサーであり、私はそこで研究員を務めています。

本書の一部は、このプロジェクトの成果です。本文中に提起されている内容の多くは、アブドゥラー師やＭＬＩの友人たちとの濃密な勉強会や、個人的に交わした会話から生まれた副産物です。

本書の試みは、私のすぐ隣に住むパレスチナ人にユダヤ人の物語を語り、ユダヤ人のアイデンティティにおけるイスラエルの重要性を説明することです。和平の障害になる主な要因の一つは、他方の

話を聞けないことにあります。それで、本書のアラビア語訳を無料でダウンロードできるようにしました。

リンクは、次のとおりです。**https://www.letterstomyneighbor.com/**

パレスチナ人、またアラブ・イスラム圏で暮らす方たちは、同リンクにアクセスして、本書で扱っているどんなことでも、私宛に書いてください。対話の精神で書いてくださった手紙には、どんな難題であろうと、返答するつもりです。私の意図は、中東における私たちの共通の未来について、公に会話を開始することなのです。

前書、『エデンの園の入り口で』（*At the Entrance to the Garden of Eden*）では、私のパレスチナ社会の訪問記を綴りました。それは、私の隣人の信仰と体験を多少なりとも理解する試みでした。本書はその続編とも言えます。今度は、イスラエル人としての私の信仰と体験を、私の隣人に説明する試みです。

本書によって、最も基本的な前提で意見を異にするお互いに、対話を促（うなが）したいのです。それで、まだ会ったことのないパレスチナの隣人であるあなたに向けて、本書を書いています。互いに耳を傾ける旅路を始められることを願って。

わが親愛なるパレスチナ隣人へ——イスラエルのユダヤ人からの手紙／目次

読者の皆様へ　2

手紙1　私たちの間にある壁　8

手紙2　要請と熱望　30

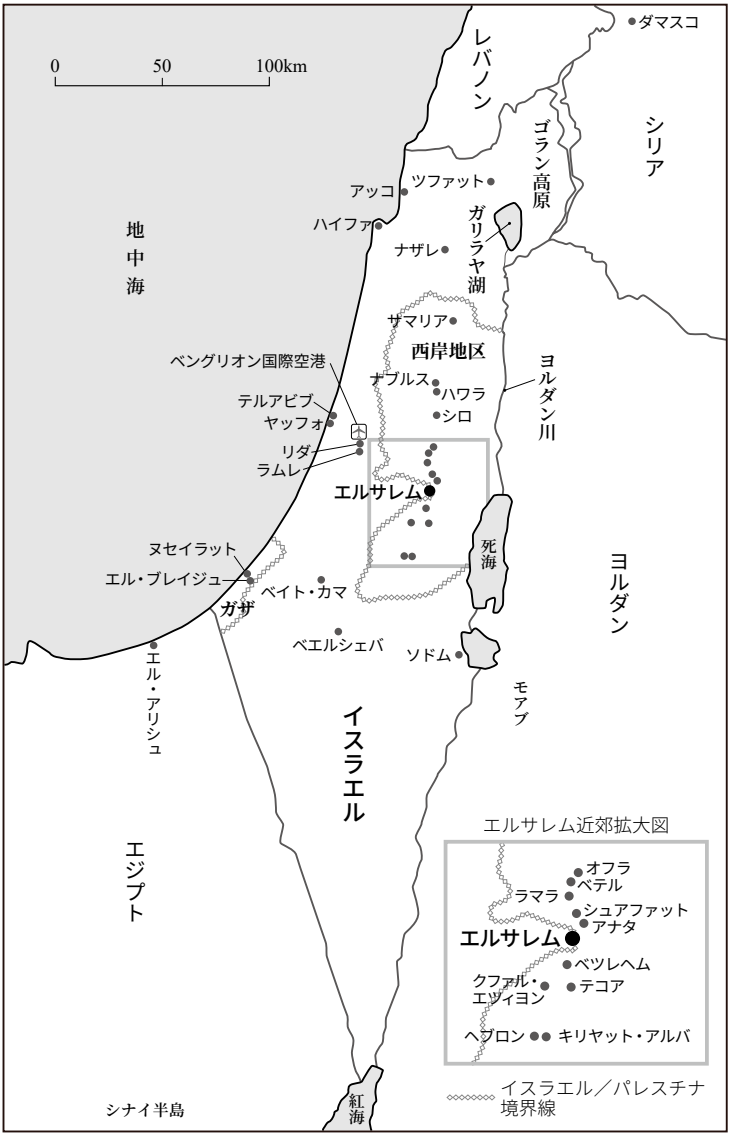
手紙3　運命と使命　53

手紙4　物語と存在　66

手紙5　六日と五十年　90

手紙6　分割案という正義　113

手紙7　イサクとイシマエル　128
手紙8　イスラエルの逆説　146
手紙9　犠牲者と生存者　164
手紙10　砂漠の端の仮庵（かりいお）　180
エピローグ――パレスチナ隣人からの返信〔初版に対する反響〕　187
謝辞　235
邦訳版・特別インタビュー　ヨッシー・クライン・ハレヴィ　242
ムハンマド・S・ダジャーニ・ダウーディ　262
訳者あとがき　274


0
50
100km
ダマスコ
レバノン
シリア
ゴラン高原
アッコ
ツファット
ハイファ
ガリラヤ湖
地中海
ナザレ
サマリア
西岸地区
ベングリオン国際空港
ナブルス
ハワラ
ヨルダン川
テルアビブ
ヤッフォ
シロ
リダ
ラムレ
エルサレム
ヌセイラット
死海
エル・ブレイジュ
ベイト・カマ
ヨルダン
ガザ
ベエルシェバ
ソドム
エル・アリシュ
モアブ
イスラエル
エルサレム近郊拡大図
オフラ
ベテル
ラマラ
シュアファット
アナタ
エルサレム
ベツレヘム
クファル・エツィヨン
テコア
ヘブロン
キリヤット・アルバ
エジプト
イスラエル／パレスチナ境界線
シナイ半島
紅海

わが親愛なるパレスチナ隣人へ

――イスラエルのユダヤ人からの手紙

手紙1　私たちの間にある壁

親愛なる隣人へ

あなたのことを「隣人」と呼ばせてください。というのも、まだあなたの名前も知らないし、あなたの個人的なことは何も知らないからです。私たちの現状を思うと、お互いの関係を「隣人」という言葉で表すのは、あまりにも軽率かも知れません。私たちは、互いの夢を踏みにじり、それぞれが抱く郷土（ホーム）への想いをかき乱しています。それぞれにとって、歴史上かつてない最悪の悪夢の現実を生きています。それなのに、隣人と呼ぶべきなのでしょうか。

でも、それ以外に、あなたのことをどう呼んだらいいのか分かりません。私は、かつてあなたに直に会えると信じていたし、それが今でもあり得ることを願ってこの文を綴っています。あなたが、私のベランダからほんの先の、近くの丘の上で暮らしている姿を想像しています。互いに会ったことはないけれど、それぞれの生活に深く関わり合っています。

だから、隣人と呼ばせてください。

私たちは、互いの景観を分断するコンクリート壁の反対側で暮らしています。私が住んでいるのは、東エルサレムのフレンチ・ヒルという住宅地で、あなたからは丘に面して建てられた階段状の住宅群が見えるでしょう。私の家は、その一番端の棟にあります。

私のアパートから、あなたがエルサレムに入るために通過しなければならない検問所が、ほんの少しだけ見えます。もちろん、あなたが通過許可書を持っているという前提のことですが。でも私には、検問所は至る所にあるように感じます。私が、早朝の日課どおり、瞑想と祈祷にふけっている時、絶え間ないクラクションの音で、時折妨げられることがあります。検問所の前の車列で、苛立（いらだ）つ運転手たちが鳴らしているのです。あなたも、あの苛立つ行列にいたことがあるのでしょうか。

時々、あなたのいる丘から煙が立つのが見えることがあります。黒い煙は、タイヤを燃やしていることを意味しているのだと分かって、かなりの時が経っています。それに続いて若者たちがイスラエル兵士めがけて石を投げる。そして、兵士たちが撃つ催涙ガスの白い煙が立つ。そんな中、あなたはどうやって通常の生活を送っているのですか。

あなたはパレスチナ人として、イスラエル人の私が享受している市民権を認められてはいません。あなたの丘と私の丘との格差は今も続き、私自身ユダヤ人として、またイスラエル人としての最も深い自己理解と道義的な責任に、疑問を投げかけています。この格差に終止符を打つためにも、私は二

国家共存を支持しているのです。

今は夜明け前。あなたの丘に面した書斎にいます。夜のしじまを乱すのを躊躇(ためら)うように、優しく、ムエジン（訳注・イスラム教の礼拝時を知らせる人）が呼びかけています。私は、白い祈祷衣で身を覆い、あぐらをかいて瞑想用のクッションに座り、向こう側から聞こえる祈りの招きに応えるように、額を床につけます。神との最も親密な対話の中で、私はあなたに語りかけることを願っているのです。

壁の向こうから、太陽がおぼろな光を放っています。腕には経札(テフィリン)の黒い帯を巻きつけ、小さな黒い箱の一つを心臓近くの前腕に、もう一つを額に結びつけると、心と知性が信仰心に結ばれます。その箱の中には、神が唯一であることを宣言した、ユダヤ教で最も重要な祈りを含む聖書の句が記されています。「聞け、イスラエルよ。我らの神、主は一つである」。あるいは、クルアーンにあるように、「彼は唯一なる神。永遠なる、すべてをあらしめる絶対的創造主」

私の窓からは、砂漠色の広大な景色の向こうに、不釣合いな蒼(あお)いスポットが見えます。死海です。その向こうにはヨルダンの峰々。私自身が、この広大な中東の一部に溶け込んでいくようです――

でも、あの壁が、私をベランダのすぐ向こうの制圧という現実に呼び戻します。

まだ壁が建てられる前のこと。色々なことがうまく行かなくなる前に、あなたを知ろうとしたことがありました。一九九八年末のこと、前世代のようで、確かに前世紀のことです。聖地で暮らす私の隣人の信仰、イスラム教とキリスト教の巡礼に出掛けたことがありました。私が願ったのは、あなた

の神学理論を知ることではなく、一人のユダヤ教徒として、あなたの信仰生活の片鱗を体験することでした。最も内面的な時間において、あなたはどのように祈るのか、あなたはどのように神と出会うのか、そのことを学びたかったのです。

忌まわしい行為を正当化するために神の名がしばしば唱えられるこの地にあって、どうしたらユダヤ教徒とイスラム教徒が多少でも神の臨在を共にし、信仰者として共に暮らせるのか。それを見極めることが私の目的でした。私が学びたかったのは、イスラム教の寺院（モスク）でアットホームな気持ちを抱くことであり、イスラム教を脅威としてではなく、霊的体験の機会として捉えることでした。ムエジンの呼び声を、その意図するとおり、目覚めの招きとして聞きたかったのです。

ユダヤ教では、贖罪日（ヨム・キプール）に断食しても償（つぐな）うことのできない罪があります。それは、神の名を汚すことです。神の名を誤って用いたり、神の名において不当な行為をした信仰者が、この罪の対象者となります。私は、宗教を異にする人たちが出会うことは、神の名を聖とすることに繋がると信じています。異なる信仰を持つ人々と交わりを持つことは、宗教的な謙虚さを育み、真理と神聖さは一つの宗教宗派に限定されないことを認識させてくれます。私にとっては、ユダヤ教が、神と深く交わるための大切な言葉ですが、神は様々な言葉を話されます。

私の願いは、そのような多様な対話を高く評価し、神の広大さに多少なりとも触れること。そんなことを思って、イスラム教の世界に入って行ったのです。

幸運にも、いくつかのモスクで、祈りの列に並んで、イスラム教の祈祷の動作に連なり、礼拝にこ

の身を浸すことを許されました。神に従う体験は、まず列をなして、両隣の人と肩と肩をそろえて一列に並ぶことから始まることを学びました。そして、神聖な動作が続く。お辞儀をし、元の姿勢に戻り、ひれ伏して、立ち上がる。それを、自分の身体があたかも水に変化するように感じるまで繰り返す。自分が生まれるずっと前から始まり、死んだずっと後にまで続く、祈りの波濤（はとう）の一滴のように感じるまで繰り返される。

聖地で共存するということは、時として、互いに距離を置いて暮らすことで保たれています。エルサレムの旧市街にある、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教、アルメニア教の四つの区域がそれを裏づけています。「安全は、互いの距離感で計られる」というメッセージです。

私のこの旅路は、距離感によって保たれている共存に逆らうもので、和合できる可能性があるという強い主張だったのです。

私は、イスラム教を探究する一環として、ガザ地区の中部にあるヌセイラットの難民キャンプに友人から招かれました。一九九〇年、かつて私はイスラエル兵としてそこに配属され、細い路地をパトロールしたことがありました。十代の若者たちが壊れた瓶や鉄梃（かなてこ）を投げて、「アムノン・ペサレム・アレイク言ってたぞ」と繰り返し叫んでいました。それは、かつてイスラエルの予備兵だったアムノン・ポメランツのことで、彼は隣にあるエル・ブレイジュ難民キャンプに迷い込み、暴徒に囲まれ、生きたまま焼き殺されました。

十年後、私は巡礼者としてヌセイラットを再び訪れました。シェイフ・アブドゥル・ラヒーム師は、

イスラム神秘主義スーフィーの小さなモスクに務める初老の指導者で、心の働きを重視する神秘家でした。師は、私をその小さなモスクに招いてくれました。モスクは、礼拝者が軽薄な行動を慎むように、墓地の向かいに建てられていました。当初、師は私をイスラム教に改宗させようとしていました。指を立てて、イスラム教の信仰告白であるシャハーダを師の後に続いて唱えるように言いました。私は、私の隣人であるイスラム教徒がどのように神に仕えるのかを学びに来たのであって、ユダヤ教の信仰に満足しています、と伝えました。師は納得しませんでした。預言者ムハンマドによらないでは神に至る道はない、と彼は言いました。

突然、師は向かいの墓地に私を連れて行きました。二人で彼の師の霊廟に入り、静かに佇(たたず)みました。彼が私の手を握りました。私たちは、自分たちが共に死すべき者であるという共通の感覚を抱きました。

数カ月後、再びそこを訪れました。その時、シェイフ・アブドゥル・ラヒーム師は、笑顔で私を迎えてくれました。彼は胸に手をあて、こう言ったのです。「あなたがあの墓を訪れて、互いの手を握り合った時から、あなたのことを身内のように思うようになった。私の弟子は、イスラム教徒であれ、ユダヤ教徒であれ、皆私の心の中にいる」

私は、一年に及ぶ旅路を通して、イスラム教を愛するようになりました。その恐れなき心、特に死に直面した際の心構えは素晴らしいと思います。西洋人は、得てして自己の死ぬべき運命に向き合うことを避けようとします。でもイスラム教徒は違う。最も平凡な者から最も知的な信者に至るまで、自らが永遠不変の存在ではないことを心得ています。イスラム教には、この自覚を信者に促す(うなが)並外れ

た力があることを、私は学んだのです。

パレスチナ人と政治を論じていると、「この土地の所有者は誰かなど、なぜ議論するのか。結局、私たちの両方がこの土地の一部になるではないか」（訳注・互いにこの地に埋葬されて、その一部となること）と言われることがあります。まったく同じ表現がユダヤの伝統にもあります。自らのはかなさを受け入れる勇気は、互いの民族の間に平和を語る宗教的な言葉を生み出し、政治的な柔軟さをもたらし、独善的な主張を回避する基（もとい）となります。

こんなことを隣人のあなたに書いているのは、これまでに私が出会ったほとんどのパレスチナ人同様、あなたが宗教的な人であり、戒律を厳格に守ってはいないとしても、信仰者だと思っているからです。私があなたの宗教を訪れたのは、平和を語るための宗教的な言葉を学ぶためでした。外交官たちの善意による努力がこれまで水泡に帰してきた理由の一つは、それぞれが抱く深い宗教的な心情を蔑（ないがし）ろにしたことにあると私は思っています。中東に和平を実現させるためには、何かしら互いの心に訴えるものでなければなりません。

それで、私は、信仰者同士の対話として、あなたに語りかけるのです。

どんなに互いの表現の仕方は違っていても、私たちの信仰は根本的に同じ世界観を持っています。究極的には、見えない世界は物質界より確実であり、この世界は偶然の産物ではなく、どんなにベールに覆われていても、ある目的に従って創造されたこと。私たちは、本質的に、肉体であるよりも、唯一なるものを根源とする霊魂であること。

私たちを創造し養い給う聖なる存在を認める代わりに、この生命の奇跡、意識の奇跡は偶然の産物であると考えることほど滑稽なことはない、と私は思っています。

私がパレスチナ社会を訪れたのは、あなたの信仰生活について学ぶだけでなく、少しでもこの紛争をあなたの視点から垣間見るためでした。パレスチナ人の悲劇、すなわち、転地の体験が行動原理となり、屈辱的な敗北の日を一年の最も大切な記念日とする、人々の壊滅的な体験に接するためでした。

私は、できる限り自分自身の物語から離れて、パレスチナ人の歴史的な思い入れや、ユダヤ人があなたたちにもたらした過ちに向き合おうと努めました。許可を得ずに家を建てたため、イスラエルに壊された人々に私は会いました。そもそも、エルサレム市当局は、パレスチナ人が許可を取得しにくいように設定しています。あなたの話に耳を傾け、パレスチナ人の歴史や回想録、詩歌を読みました。あなたの記録を知って、苦悶しました。私は決して、ユダヤ人の郷土帰還――私たちユダヤ人はそう表現するのですが――への愛を失ったわけではなく、粘り強さと勇気、そして何よりも信仰の物語として大事にしています。ただ、それに真っ向から対立する、侵略と占領、追放というあなたの物語から、もはや目を逸らすことができなくなりました。私たちの二つの記録、同じ物語の相容れない二つの視点が、私の中で共存するようになったのです。

イスラエルに住む私たちは、長年あなたたちを、まるで姿形のない見えない存在のように扱い、無視してきました。アラブ世界が、ユダヤ人の、国家主権に値する民族として自らを定義する権利を否

定してきたように、私たちもまた、パレスチナ人が、アラブ民族の中でも特有な人々であると自らを定義する権利を否定し、同じように国家主権に値する人々であることを否定してきました。紛争を解決するには、互いの自決権だけでなく、それぞれの自己定義の権利を認め合う必要があります。

今では、多くのイスラエル人が、あなたたちの民族自決権を認めるようになりました。一九八〇年代後半に勃発したパレスチナ人の一斉蜂起、第一次インティファーダの後、私と同世代の多くのイスラエル人は気づいたのです。占領が、あなたたちだけでなく私たちにとっても災難であること、イスラエルの左派がかねてから警告していたことは正しかった、と。ヨルダン川から地中海に至るすべての土地に対する私たちの歴史的な権利を履行するには、あまりにも大きい代償が伴うことを悟ったのです。占領が永続化すれば、私たちは、ユダヤの倫理的な価値を体現する民主国家であり続けることができなくなります。あなたたちをいつまでも占領することを、私たちは望んでもいません。私が、私の郷土に帰還したのは、他の民族の郷土意識を否定するためではありません。

あなたの主張や痛みを否定するつもりはない、と私が言うとき、あなたがそれを聞き入れてくれることを願っています。

もちろん、多くのイスラエル人は、正しいのは自分たちのほうで、あなたたちには実質的な歴史的権利など何もない、と主張し続けていました。でも、かなりの人が違和感を覚えるようになったのもその頃です。「自責の念に駆られたイスラエル人」の陣営が現れました。真摯な和平案をもってパレスチナ人に歩み寄る責任は、占領しているイスラエル側にあると私たちは思ったのです。そのために、

一九九三年九月十三日、オスロ和平プロセスの正式な幕開けとして、ホワイト・ハウスの芝生の上でヤセル・アラファトと握手したイスラエルの首相イツハク・ラビンを、私たちは支持しました。

そして、二〇〇〇年九月に第二次インティファーダが勃発。何千ものイスラエル人が私たちの街頭で殺害され、負傷しましたが、あなたの地域はさらに多く数千人もの犠牲者が出ました。爆破されたバスの残骸をイスラエルで目にするようになりました。惨事の記憶は薄れつつありますが、今でもはっきりと憶えていることがあります。自爆テロリストが、エルサレムにある私の職場に近い喫茶店を攻撃し、父娘を殺害しました。その娘が結婚する前夜のことでした。翌日、結婚式に招かれていた人たちは、彼女の葬式に参列したのです。私は、その家族と面識があったので、喪に服す遺族を訪れました。妻として、母親として、悲嘆に暮れる夫人は、信仰で毅然とした態度をもって、訪れるすべての人を慰めていました。その時に気がついたのです。どんなことがあっても、ユダヤ民族をこの地から再び引き離すことはできない、と。

妻のサラと私は当時、二人の十代の子供を育てていました。毎朝必ず、さようならのキスをするようにしていました。この子たちと二度と会えないかもしれない、と思いながら。二人のすぐ近くで、テロ事件が何度も起こりました。コビー・マンデルという十三歳の少年が石打ちに遭って殺害されたのですが、私の息子ガヴリエルは彼とサマー・キャンプで一緒でした。コビーくんの遺体は洞窟の中で見つかりましたが、あまりにも損傷が酷くて、ＤＮＡ鑑定でやっと彼の遺体だと認定することがで

きたほどでした。

和平プロセス破綻の責任は誰にあるのか。この点に関しては、イスラエル人とパレスチナ人では見解が大きく分かれるし、これからも議論が絶えないでしょう。私を含むほとんどのイスラエル人は、私たちの当時の指導者たちが和平実現に尽力してきたと信じています。それに対して、あなたたちの指導者は妥協を拒み、テロに訴えてイスラエル側の意志を損ね、さらなる譲歩を勝ち取ろうとしていたと認識しています。オスロ合意がなぜ失敗したのかということについて、あなたの意見がどれだけイスラエル側の認識と異なっていたとしても、この認識が、私たちイスラエル人の世界観と政策を形成してきたのかを考慮することなくして、今日のイスラエル人を理解することはできません。

第二次インティファーダを通して、私たち、自責の念に駆られたイスラエル人のほとんどが、パレスチナの指導層に和平の意志があるとは信じられなくなったのです。テロだけが理由ではありません。私たちが失望したのは、史上最悪のテロの波が私たちを襲ったタイミングが、イスラエル側が、占領を終わらせるための誠意ある提案を——それも二つの提案を——した後だったからです。二〇〇〇年七月のキャンプ・デーヴィッドで、エフード・バラク首相は、イスラエルの指導者として初めて、パレスチナ人の住む東エルサレムを首都として、西岸地区とガザ地区にパレスチナ国家を築くことを認めました。イスラエルは何十という入植地を撤収し、数万人のユダヤ人居住者を彼らの家から追い出すつもりでした。当時は壁もありませんでした。障壁が建設されるとしてもそれは普通の国境フェンスであり、イスラエル国とパレスチナ国を区別するためのものです。占領に必然的に伴う不義が終わ

るはずでした。しかしアラファトはその提案を退け、代案さえ提示しませんでした。

キャンプ・デーヴィッドでの交渉が失敗に終わり、イスラエル人とパレスチナ人は、果たしてイスラエル側が真剣な努力をしたのかということで論じ合いました。しかし半年後の二〇〇〇年十二月、アメリカのビル・クリントン大統領が独自の和平案を提示しました。バラクがキャンプ・デーヴィッドで提示した九一％前後の領土を九五％に引き上げ、さらに補正的な領土交換と、イスラエルの領土を横断するように西岸地区とガザ地区を繋ぐ道路を敷くという提案でした。この時も、バラクがイエスと言ったのに、アラファトはノーと答えました。後にクリントンは、和平プロセスはアラファトのせいで決裂したと述べています。

紛争終結の可能性を信じていた多くのイスラエル人にとって、これは衝撃的な瞬間でした。「パレスチナ人の指導者たちはイスラエルとの和平を望んでいて、こちらが確かな提案をすれば先方は当然同意してくれるはずだ」という主張を、イスラエル国民に説得しようとして、生涯を捧げた人たちを知っています。イスラエル左派の悲劇は、その主張を国民の大半に説得することに成功してしまったことです。そして和平プロセスは、文字どおり、私たちの目の前で空中分解してしまいました。

二〇〇八年、イスラエルのエフード・オルメルト首相が、パレスチナの指導者マフムード・アッバスに、土地交換と共に、ほぼ全面撤退に近い提案を申し入れました。アッバスは応答すらしませんでした。今日、近隣諸国と和平を結んで正常な生活を送りたいと切に願っている一般のイスラエル人は、パレスチナ指導者が和平を望んでいると今なお考えている左派の人々の主張を、妄想と見なしていま

す。

第二次インティファーダの非情な暴力に劣らず、イスラエル人に動揺を招いたのは、その根底にある動機でした。それは、私たちが共有するこの地でユダヤ民族が主権国家として存在する権利の否定でした。この地は、二つの民族が共に分かち合って暮らさなければならないという考えを否定したのです。この地におけるユダヤ人の存在を抹消することを意図したもので、テロより根の深い病理の現れでした。反乱は、占領に対してではなく、イスラエルの存在そのものに対してだったのです。

占領に対しては暴力をもって戦うしかない、というパレスチナ人の声を私は聞いてきました。イスラエル人の目には、逆の力学が働いているように見えます。私たちの視点から見たら、占領がテロをもたらすのではなく、テロが占領を長期化させているのです。私たちがどれだけ努力しても、結局私たちに対するテロが止むことはないとイスラエル人は思っているのです。実際、イスラエルが二〇〇五年にガザを撤退した時がまさにそうでした。入植地を取り壊し、軍事基地を撤収しました。それなのに、その後何年もの間、数千発のロケット弾が境界近くにあるイスラエルの住宅地に打ち込まれたのです。

パレスチナの指導者は、自らの同胞に、イスラエルに国家としての歴史的な正当性はないと絶えず言い続けています。私たちは、彼らを通して悟りました。この紛争は、最終的に、境界線の問題ではなく、入植地やエルサレム、また聖所の問題でもない。この境界内のどこであれ、私たちの存在する権利についての問題であり、私たちユダヤ人が一つの固有の民族として認めてもらう権利についての

問題なのだ、と。

イスラエル左派の衰退は、私の国の政治を一世代にわたって変化させてしまいました。オスロ合意の壊滅的な崩壊に伴い、右派が政権を取り戻しました。一九九〇年代、イスラエルの和平推進派のデモには数十万人が集結しましたが、今ではせいぜい集まっても数千人でしょう。

もちろん、多くのイスラエル人は、両民族がこのひどい閉塞状態に至った責任は自分たちにもあることを十分心得ています。例えば、オスロ和平交渉の最中も、私たちが入植地での建設を続けたために、あなたの同胞は、私たちイスラエル人の紛争解決への約束に疑問を抱き、無力感を強めたことでしょう。しかし紛争解決の決定的な瞬間に、私たちの指導者がイエスと言うのに対してパレスチナの指導者はノーと言うのを、私たちは見てきました。

私がここまで詳しく言及するのは、この瞬間が、イスラエル社会をも私自身をも変えてしまったからです。なぜ私が占領の重荷を道義的に受け入れられるのか、窓の外に見える壁と共に生活を続けることができるのか、この事実からお分かりでしょう。

私がパレスチナ社会を訪れることもなくなりました。あまりにも危なくなったからです。パレスチナ自治政府の管轄する地区に入ったイスラエル人は、リンチに遭いかねません。やがてイスラエルは、国民がそのような地区に出入りすることを禁じるようになりました。私がパレスチナの人々と結んだ関係も薄れてしまいました。

二〇〇〇年代の初め、人間爆弾が炸裂するにつれ、私は、たいていのイスラエル人と同じように、

西岸地区とイスラエル、あなたの丘と私の丘を隔てる防壁の建設を支持しました。自爆テロ犯が西岸地区から主権国家であるイスラエルへ容易に侵入し、私たちのバスに乗り、喫茶店に入るのを阻止する必死の試みだったのです。

効果はてきめんでした。防壁が建設されると自爆テロの波は収まりました。この防壁は、私の子供たちの安全を守ってくれる、中東で生き残るための手段であると思っています。だから、この嫌いな壁に感謝しているのです。他にどうしようもないと思うからです。

第二次インティファーダのせいで、私の歩み寄ろうとする気力はすっかり失せてしまいました。どんな形であれ、あの旅路を続けるのは無理だと思ったのです。あなたの物語も、主張も、不満も、もう聞きたくなかった。私はあなたの丘に向かって叫びたかった。こんなはずじゃなかった！　私たちのパートナーになって、妥協案を交渉しようではないか！　私を見てくれ、私の存在を認めてくれ！私にも物語があるんだ、と。

パレスチナ側のメディアで、私たちユダヤ民族の物語がどう描かれているのかを目にするにつれて、絶望しそうです。パレスチナのメディアも、思想的には多様ですが、ただ一点においては共通しています。それは、ユダヤ人は民族ではないので国家を持つ権利はないという考えです。パレスチナの学校でもモスクでも、このメッセージが流布しています。ユダヤ人が昔この地に住んでいたというのはシオニストの虚言（きょげん）で、エルサレムの丘の上に神殿などなかった。ナチスによるユダヤ人大虐殺（ホロコースト）もシオニストの戯言（たわごと）で、それは欧米からイスラエルの支持を得るために作り上げられたもの。あなたの側で

広く浸透している言説によれば、私は根っからの嘘つきで、歴史もなければこの地のどこにも正当な権利を持たない土地泥棒で、この地とは関係のないよそ者となっています。

あなたのメディアでは日常的に、イスラエルもユダヤ人も怪物（モンスター）のように描かれています。九・一一の同時多発テロの責任は私たちにあり、起こらなかったはずのホロコーストで私たちはナチスと手を組み、パレスチナ人を殺して臓器を奪い、さらに自然を巧みに操って環境災害を起こしている。そして、もちろん、私たちは秘密裡に世界を支配していると伝えられています。

パレスチナ人の中にも、ユダヤ人を魔物として描くのに嫌悪し、二つの正義の物語の板挟みになっていることを率直に認める人がいることを、私は知っています。あなたもその一人であることを願っています。ただ私の知る限り、このような捉え方はパレスチナの主流なメディアでは禁じられています。パレスチナ人側の物語を打ち消すのではなく、それと両立するような形で述べたとしても、ユダヤ人の物語の正当性を少しでもほのめかすような発言は封じられてしまいます。

もし私が存在せず、私の存在する権利もなければ、どうやって互いに和解などできるのでしょうか。だからあの壁は、互いの間にあるより深い壁の現れなのです。私たちは、最も基本的な共有言語さえ合意することができません。私は、この地における私の存在を、追放を強いられた固有の民族が帰還する一端と捉えています。ユダヤ国家の再建は、歴史の正義であり修復の行為です。私にとって、イスラエルの主権のもとにエルサレムでユダヤ人として生きることは、精神的な誇りと宗教的な霊感の源（みなもと）なのです。

私は、あなたの存在はこの地において不可欠なものと考えています。パレスチナ人は、よく自らをオリーブの木に例えます。私は、あなたがこの地に根を下ろしていることに、あなたがこの風景に抱く愛に、啓発されます。

それで、あなたは私をどのように捉えているのですか。あなたから見れば、私は、歴史的な犯罪と宗教的な侵害である植民地主義による侵略の一端なのでしょうか。それとも、この地に存在する正当性が、あなたにもあるように、ユダヤ人にもあると認めることができますか。この地で暮らす私の生活を、かつて引き抜かれたオリーブの木が元の場所に植え戻されたのだ、と見ることはできるのでしょうか。

私たちの対立が深まるにつれ、壁はこの風景にますます溶け込んでいき、住宅や丘や移りゆく光線の一部とさえなっていくように感じます。壁がまったく消えてしまうこともあります。私の目は、壁から視線を逸らすことを学びました。私のアパートは十分高いので、壁の向こうの荒野に目を移すことができるのです。抑圧から目を逸らし、広大な風景を楽しむことができるほどです。

でも、壁は依然として屈辱の象徴としてあり続けています。壁の存在は、イスラエルが近隣の人々の間に自らの場所を見出だしたいという、私の抱く最も深い希望を否定します。

第二次インティファーダの後の数年間、私は、多くのイスラエル人のように、こう言っていました。私たちは和平のために努力したのに、あらゆる残忍な方法で拒絶された、と。でも、これではあまり

に軽薄です。私は、一人の信仰者として、この互いの断絶を恒久的なものと受け入れることは許されず、絶望と和解することは禁じられています。クルアーンが力説するように、絶望は神への不信と同じことです。和解の可能性を疑うことは神の力を制限することであり、特にこの地における奇跡の可能性を制限することになります。平和が不可能と思えるとき――そんなときにこそ、聖書は私に「平和を尋ねて、これを追い求めよ」（詩編三四・一五）と命じています。

だから隣人さん、私はあなたにお願いしたいのです。私が真摯に語る私の物語があなたの心に響くことを希望し、たとえ意見が完全に一致しないとしても、互いに分かり合える一助になることを願っています。私がイスラエル政府に望むのは、積極的に二国家共存案を推し進め、たとえ道のりは遠くとも、合意のための可能性を探ってくれることです。さらに私の政府に望むのは、安全保障や脅威についてだけでなく、希望と共存と道義的な責任についての言葉を語ることです。そして、入植地の拡張を政府が中止することを願っています。これらは、あなたのためだけでなく、私のためでもあります。この文を書いている今も、政権についているイスラエルの右派政府は、未来を見通したアプローチができないように見受けられます。

私の願いは、今、私たちの近隣諸国が――シリアの惨事でも、中東の他の地域でも――壊滅的な状況にある時、パレスチナ人とイスラエル人が共に絶望の淵からから這い上がり、生きることを選択することです。でも、それが成るためには、私たちが互いに夢見ているもの、そして恐れていることを知り合う必要があります。

私は、あなたの社会を二度訪れました。最初は一兵士として、次は巡礼者として。それは、占領者としてしかあなたと接することのできない現状に甘んじたくなかったからです。その体験については、もっと詳しく語る機会があるでしょう。今私が申し上げたいのは、終わりそうもない占領が、私の隣人の生活に及ぼす衝撃に耐えられなかったことです。そして、私のユダヤ人としての道義的な信頼性――正義と公正を重んじ、神の似姿に創造された人間生命の価値をその世界観の中心に据える、由緒ある伝統の担い手としての信頼性――が損なわれることにも耐えられませんでした。

あなたへの訪問を再開する一つの方法として、私はこの手紙を書いています。ただ、これまでとは違います。最後に私がパレスチナ社会を訪れた時は、あなたを知ろうとしました。あなたと言い争うことも、自分自身について語ることもしませんでした。むしろ私は聞こうとしたのです。

今度は、私の信仰と私の物語――二つは不可分ですが――を、あなたに伝えたいと思っています。私がユダヤ人であるのは歴史のゆえです。だから私は、あなたの隣人としてこの地に戻ってきました。互いの見解を相手に納得させるのは無理でしょう。私たちはお互い、自らの存在に深く根ざした物語の中で生活しています。集団と個人のあり方を明確に定めているので、それぞれの物語を捨て去ることは裏切りとなるでしょう。

でも、私たちのそれぞれの社会に浸透している相手側について語る物語を、私たちは問い直す必要があります。私たちは、それぞれの歴史上最悪の悪夢を相手側に投射してきました。あなたにとって、私たちは植民地主義者、十字軍。そして私たちにとって、あなたはユダヤ民族を抹消しようとする最

新の殺戮的な敵。

そうではなく、私たちは互いを、ヨルダン川と地中海の間の小さな同じ土地にしがみつく、トラウマを抱えた民族と見なすことはできないでしょうか。どちら側も、相手が訴える正義の主張と和解することなくして、和解も正義も見出だすことはできません。

互いを理解しようとする努力を少しもしないで結ばれた和平は、長続きしないと私は思います。私たちの指導者が今後、どんな公式文書に調印しても、あなたの丘や私の丘の現実生活で損なわれてしまう。それは冷たい協定となり、色あせて死滅し、むしろ抹殺されてしまう愛のない和平となるでしょう。いずれにしろ、私たちは、あまりにも密接に暮らしているので物理的に離れて暮らすことは不可能です。だから生きていくために、私たちは共に生きることを学ばなければならないのです。

確かに征服者のほうが、被征服者よりも、相手側の異なる物語に開かれたより繊細な立場を取りやすいのは常です。征服者である私が、どんな権利をもって、互いに認め合うべきことをあなたに求められるでしょうか。私が、恐れを抱く特異な征服者だからと言えないでしょうか。端から端まで十五キロ弱だった一九六七年以前の国境まで撤退することは、混沌とした中東で、自らを守る能力が致命的に損なわれるのではないか。損なわれるだけでなく、私は抹消されてしまうのではないかと恐れているのです。

もうだいぶ前に私は悟ったのです。私をこの地に結びつける歴史的な権利と宗教的な悲願があるか

らといって、他の人々に犠牲を払わせてこの地すべてを所有することは許されない、と。だからどれだけ痛みが伴っても、私は、二者間の正当な主張の衝突を解決する現実的な手段として、分割案を支持します。

ただ、イスラエル国の正当性がパレスチナ社会やアラブ・イスラム世界で広く否定されてきた体験が、私たちの態度を頑なにし、憤慨させているのです。そして、ありのままの私たちを受け入れず、私たちがこの地域に不可分の存在であることを拒絶する限り、あなたの側は、繰り返し私たちの固い決意を過小評価するのです。あなたに劣らず、私も、互いに共有するこの地に、自分の場所を確保するためには犠牲を払うつもりです。

占領終結の鍵は、私たちユダヤ人が占領地から撤退して領土を縮小する意志を示すこと。その返礼としてあなたの側は、西岸地区とガザ地区をパレスチナ国家の領土と認め、イスラエル国を脅かすことはないという意志を表明して、何らかの希望をユダヤ人に示すことです。

これから書くことの多くは、あなたにとって不快に感じることかもしれません。これから手紙の中でも、「イスラエルの地」という表現を私は使います。私にとっては自然な言い回しなのですが、あなたは侮辱と感じるかもしれません。そんな意図はありません。私が願っているのは、あなたが、あるいは壁のそちら側にいる誰かが、この手紙を読んで応答してくれることなのです。私にとって、あなたが不特定の存在ではなく、一人の人格、一つの声となってくれることを願っています。あなたの怒りの反応でも構いません。私たちの間でこれまで試みられてきたことはことごとく悲惨な失敗に終

わり、双方に死と破壊をもたらしてきました。さあ、互いに対話を始めてみて、何が起きるか試してみませんか。

ということで隣人さん、お待たせしました。あなたを、私の精神的な家（ホーム）にお招きします。

いつの日か、互いの実際の自宅（ホーム）に喜んで迎え入れる日が来ることを願いつつ。